

閻浮提中御書

弘安元年 五七歳

「閻浮提中飢餓」又云「又示現閻浮提中刀」と。又云はく「又示現閻浮提中劫起」等云云。人王三十代国の聖明王国にわたす。王此を用ひずして三代仏罰にあたるべし。釈迦仏を申し隠す念仏者等善光寺の阿彌陀仏云云。上一人より下万いたるまで皆人迷。此をあらわす日蓮にあだをなす人は、総て日蓮を犯す。天は総て此の国を二に云はく「経を誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云。又云はく「多病瘠瘦」と。第八に云はく「諸重病」と。又第二に云はく「若し医道に従ひ、方に順じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さん」と。又云はく「若し自ら病有らば人の救療すること無く、設ひ良薬を服すとも而も復増劇せん」等云云。弘法大師後に望んで戲論と作す。東寺の一門上御室より下一切の東寺の門家は法華経を戲論云云。叡山の座主並びに三千の大衆日本国山寺一同に云はく、大日経等云云。智証大師の云はく、法華尚及ばず等云云。園城の長吏並びに一国の末流皆云はく、法華経は真言経に及ばずと云云。此の三師を用ふる国主終に皇法尽き了んぬ。明雲座主の義仲に殺され、承久に御室思ひ死にせし是なり。

願くは我が弟子等師子王の子となりて群狐事なかれ。過去遠々劫より已来、日蓮がごとく身命をすて強敵の科を顕師には値ひがたかるべし。国王の責めなををそろし。いわうや閻魔のせめをや。日本国のせめは水のごとし。ぬるををそる事なかれ。閻魔のせめは火のごとし。裸にして入るとをもへ。大涅槃経の文の心は、仏法を信じて今度生死をはな人の、すこし心のゆるなるをすめむがために、疫病を仏のあたへ給ふ。はげます心なり、すむる心なり。

日蓮は凡夫なり。天眼なければ一紙をもみとをすことなし。宿命なければ三世を知ることなし。而れども此の経文のごとく日蓮は肉眼なれども天眼・宿命日本国七百余歳の仏眼の流布せしやう、八宗十宗の邪正、漢土・月氏の論師・人師の勝劣、八万十二の仏経の旨趣をあらあらずいちし、我が朝の亡国となるべき事、先に此をかながへて宛も符契のごとし。此皆法華経の御力なり。而るを国主は讒臣等が凶言ををさめてあだをなせしかば、凡夫なれば道理なりとをもちて退する心なかりしかども、度々あだをなす。

美食ををさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候ひぬ。されども凡夫なればかんでも忍びがたく、熱をもふせぎがたし。食ともし。麦目が万里の一飡忍びがたく、思子孔が十旬の九飯堪ゆべきにあらず。読経の音も絶えぬべし。観心の心をろそかなり。しかるにたまたまの御とぶらいた事にはあらず。教主釈尊の御すめか、将又過去宿習の御催しか、方々紙上尽し難し。恐々謹言。